



# HISTORIAN'S WORKSHOP

## 多言語論文執筆セミナー 7

仲田 公輔（岡山大学文学部講師）：英語論文の執筆と英国博士課程での体験を中心に



# 本日の構成

- 簡単な自己紹介
- 1. 英語論文執筆記
- 2. 博論執筆記
- 3. 博論書籍化について（中間報告）
- 4. （外国語で）論文／博論を書くために

Disclaimer：  
受け売りが多いです！

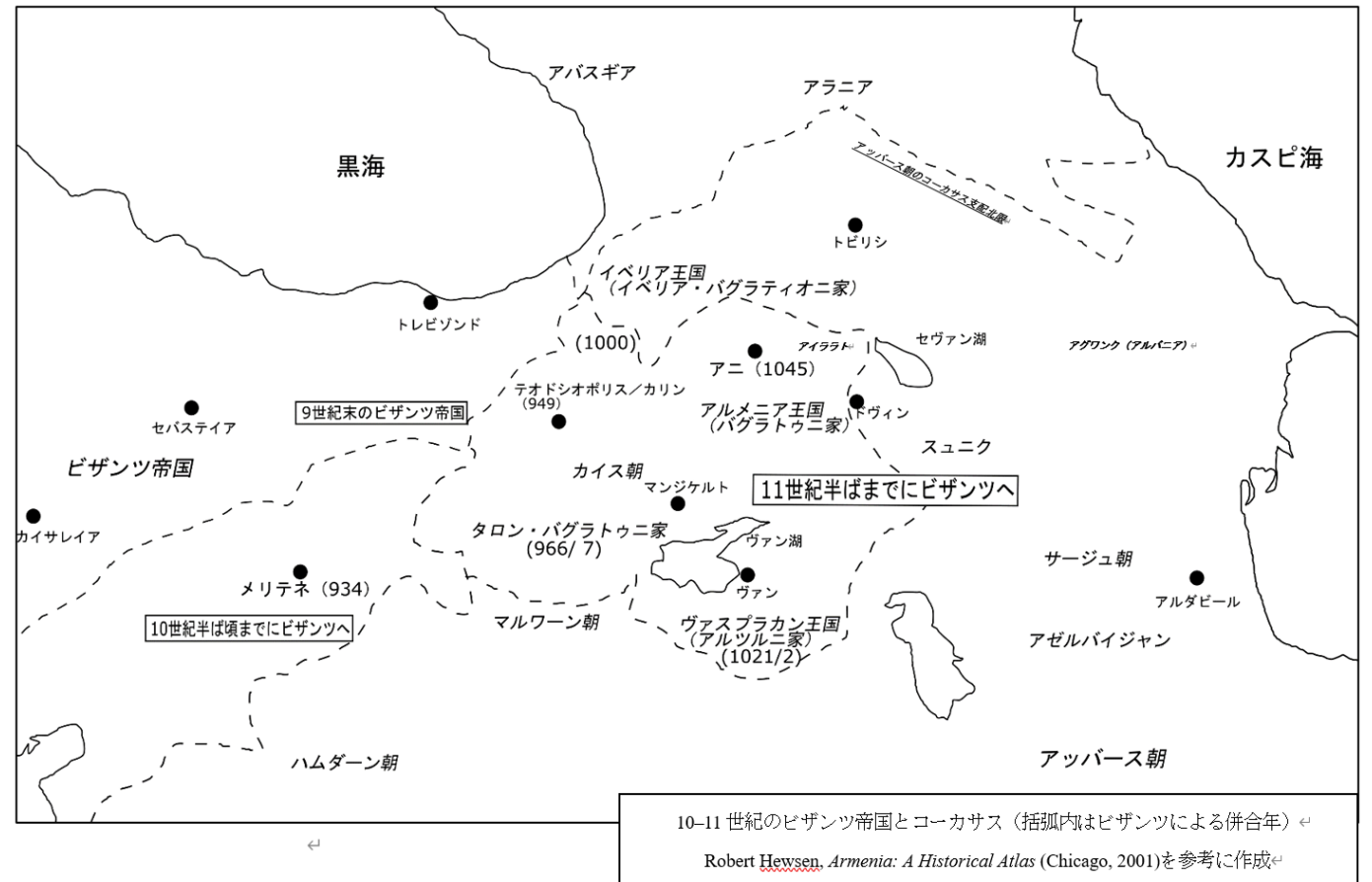
# 自己紹介

- 1987年静岡県川根町生まれ（山と川と茶畑しかない）
- 東大学部（2006-2010）：文学部西洋史
- 東大修士（2010-2012）：人文社会系西洋史
- 東大博士／学振DC（2012-2015）：同上
- St Andrews客員研究員（2016-2017）：School of History
- St Andrews博士課程（2017-2020）：Institute of Mediaeval Studies
- （海外学振辞退）
- 岡山大学講師 [テニュアトラック]（2020-現在）：文学部西洋史領域

⇒戦略的に動いてこうなったと言うよりかは、めぐり合わせでこうなったという側面が強い

# 研究関心

- 10世紀におけるビザンツ帝国のコーカサスへの拡大とその後の境域統治
- その中での文化交流とその帰結：アルメニアの非カルケドン派に対する外交・統治におけるキリスト教文化（特に聖人崇敬）の利用と現地の反応
- ビザンツ帝国支配下のアルメニアにおける社会・文化の変容



# なぜまた10-11世紀のアルメニアなのか

- 東西境域としてのアルメニア：サーサーン朝、そしてウマイヤ朝・アッバース朝の庇護ないし支配下で、東方の大国の影響を強く受け続けてきたアルメニアの社会・文化とビザンツ由来の要素の接触が増大し、大きく変容するターニングポイント。
  - 特にその中での現地の人々の主体的な動向は民族による国家を強調する史観では研究が不十分
  - 11世紀の国家滅亡～12世紀のキリキア国家再興までの空白期間？
- その後のアナトリアのトルコ・イスラーム化や十字軍に接続可能な中長期的視座の構築を目指す



ターバン姿のアルメニア王ガギクI世バグラトゥニ（在位989-1017/20）

REVUE DES ÉTUDES  
ARMÉNIENNES

TOME 38

DIRECTEUR  
N.G. GARSOÏAN  
DIRECTEUR ADJOINT  
CHARGÉ DE LA PUBLICATION  
J.-P. MAHÉ

RÉDACTEURS  
A. MARDIROSSIAN  
Ch. de LAMBERTERIE

L'ASSOCIATION DE LA REVUE DES ÉTUDES ARMÉNIENNES

PEETERS  
2018-2019

Trends and Turning Points

Constructing the Late Antique  
and Byzantine World

Edited by  
*Matthew Kinloch and Alex MacFarlane*



BRILL



SPICILEGIUM

ONLINE JOURNAL OF JAPAN SOCIETY FOR  
MEDIEVAL EUROPEAN STUDIES,  
VOL. 1 (2017)

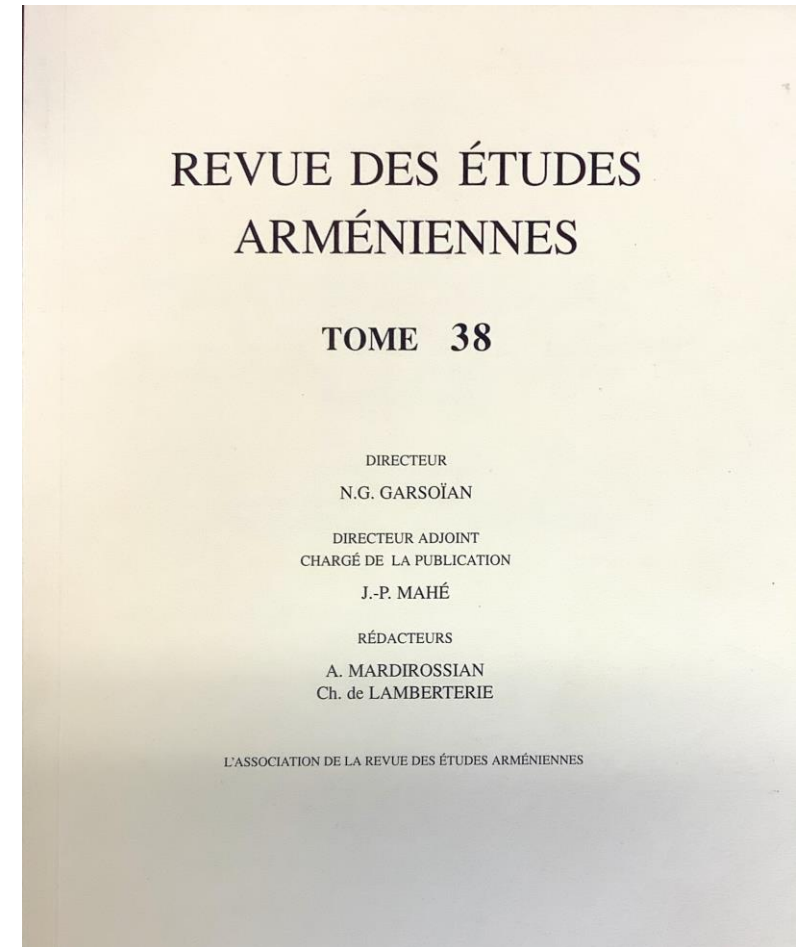


1. 英語論文の執筆（国際学会英文誌、国際共著、国内学会英文誌）



## 1-1. 分野専門誌へのチャレンジ

- Kosuke Nakada, 'Uxtanes of Sebasteia and Byzantine-Armenian Relations in the Tenth Century', *Revue des Études Arméniennes* 38 (2018/9), pp. 167-194.
- 10世紀のビザンツ拡大の中でのビザンツ領内のアルメニア人聖職者の歴史書の分析
- フランスの前近代アルメニア研究の総合誌（言語学、歴史学、文学、美術 etc.）
  - 他の候補として *Journal of Armenian Studies*（アメリカのアルメニア研究総合誌）、*Le Muséon*（フランスの東洋学研究雑誌）もあったが、個別具体的で専門的な議論を受け入れてくれそうなところを選択





## 1-1. 分野専門誌へのチャレンジ

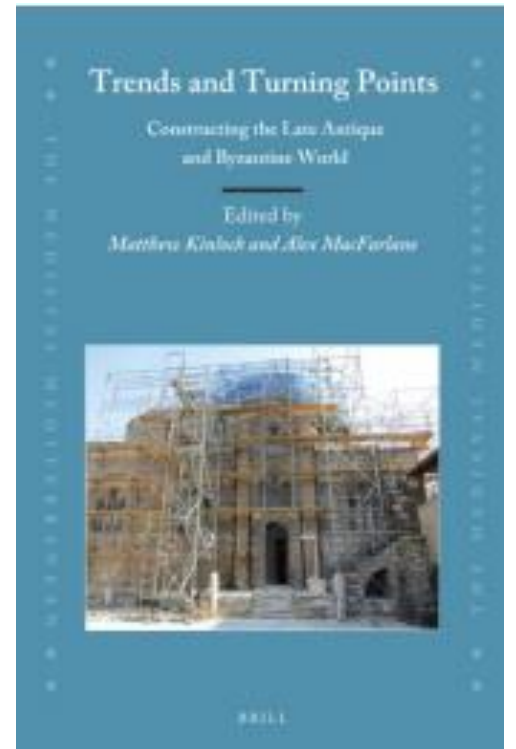
- 本来、（客員研究員としての）留学1年目の成果をまとめて提出することを意図
  - 博士課程修了後に次の段階に進む際、業績があるに越したことはない by 指導教員
- 手応えを感じたのでその後一年かけて論文に

## 1-1. 分野専門誌へのチャレンジ

- 2017年夏投稿
  - 年刊誌ならそれなりに早くフィードバックが帰ってくるだろうという見通しだったが...
- 2018年秋頃にアクセプト通知
  - あまりに遅いので夏頃にリマインド
  - ほぼそのままのかたちでの掲載決定。
- 2019年夏に刊行
- 博論の第5章に（後述）
- 英語は留学経験のある英文学専門の方と指導教員（英）にチェックしてもらう

## 1-2. 国際論集への参加

- Kosuke Nakada, 'Omens of Expansionism? Revisiting the Caucasian Chapters of *De Administrando Imperio*', *Trends and Turning Points: Constructing the Late Antique and Byzantine World*, ed. Matthew Kinloch and Alex MacFarlane (Leiden: Brill 2019), pp. 148-165.
- 10世紀ビザンツの編纂書『帝国統治論』内のコーカサスに関する記述の分析



## 1-2. 国際共著論集への参加

- 2016年2月に開催された国際若手研究者（Graduate and Early Career Researcher [ECR]）学会（The Oxford University Byzantine Society, 18<sup>th</sup> International Graduate Conferenceからの精選論集[Selected Papers]）
- 2015年冬頃、指導教員（予定）から学会参加をすすめられる
  - それまで日本で（とくに博士に上がってから）してきた研究を英語化して報告することに
- 2016年2月末、学会本番

## 1-2. 国際共著論集への参加

- 学会後、**第一段階審査**。論集への参加を呼びかけられる。
- 2016年5月、第1稿提出
- 2016年10月末、**第一次査読結果**（Oxford Byzantine Societyによる）
  - 英語の改善を条件に採択...
- 2017年5月、第二稿提出
  - 英語は編者の院生も手伝ってくれる
- 2018年4月、**Brill社側の査読を通り、採択通知**
- 2019年5月、ようやく出版！
  - 博論とは大きく関わらず、一部で前提として引用した程度

## 1-2. 国際共著論集への参加

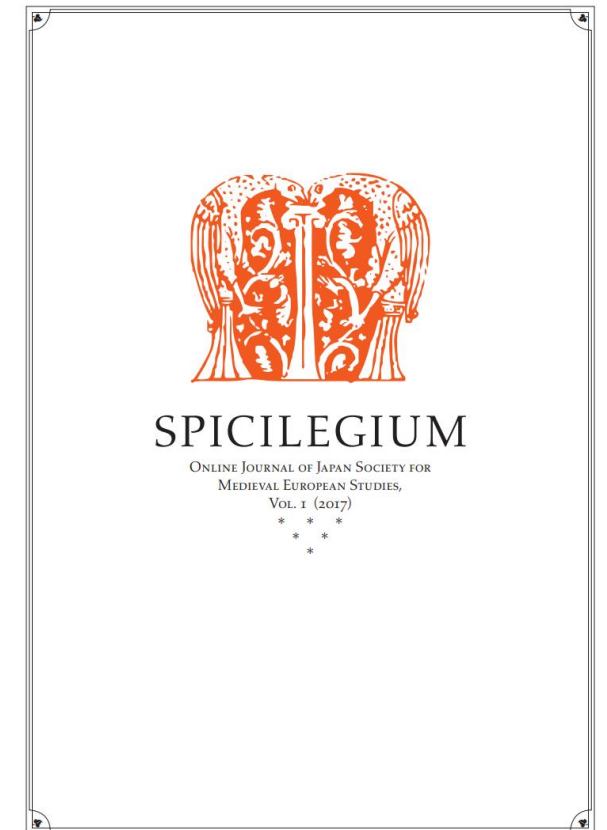
- 国際学会をもとにした共著書への参加のメリット
  - 共著者たちとのネットワークができる（後述するように、地方大学に留学した身としてはありがたかった）
  - 学術書の出版プロセスに触れることができる（博論出版の前に知れるというメリット）
  - （ECR中心の場合）特に念入りな査読が行われ、詳細なフィードバックを得られる

## 1-2. 国際共著論集への参加

- デメリット（注意すべき点）
  - とにかく時間がかかる（待ちが多い）割に個別のスケジュールはタイト
  - 機会はそれなりにある（※分野による）が、博論との兼ね合い（大部分既刊はNG）で取捨選択が必要
    - 実際、二度ほど断る

## 1-3. 国内英文誌への投稿

- Kosuke Nakada, 'The *Taktika* of Leo VI and the Byzantine Eastern Frontier During the Ninth and Tenth Centuries', *Spicilegium* 1 (2017), pp. 17-27.
- 皇帝レオン6世（在位886-912年）の軍事書を分析





## 1-3. 国内英文誌への投稿

- *Spicilegium*（2017年創刊）：日本西洋中世学会の英文誌
- 当初からそれまで日本語でしか発表されていない西洋中世研究の業績を国外に発信することも意図
  - Cf. 『史学雑誌』の執筆要項変更：外国語で既発表のものを大幅リバイズしたのも受け付ける
- 2013年に出した日本語論文（修士論文ベース）を増補改訂して投稿
  - （英語化は英国大学院への応募の際のWritten Workとするために既に行っていた）
  - 英語はその際に業者ネイティヴチェック
- 博論とはほぼ関係なし

## 参考：院生や若手研究者向けの論文賞

- 論文賞などに応募し、掲載を目指す手も
- TMJ (*The Medieval Journal*) Prize
  - <https://tmj.wp.st-andrews.ac.uk/tmj-prize/>
- 西洋中世史の方は是非！！

THE MEDIAEVAL JOURNAL  
ESSAY COMPETITION  
2020



## 2. 博士論文の執筆について

## 2-1. 留学先の選定と留学形態について

- 2016年1月、セント・アンドルーズで客員研究員として留学開始
  - 当初、2年間（奨学金期間）の客員研究員留学後、東大に戻ることも考える
- 留学最初の半年の成果（REArm論文の元になる）が得られた頃から、ここにいたほうが良い博論が書けるのではないか、という思いを抱き始める

## 2-1. 留学先の選定と留学形態について

- 2016年夏、思い切って指導教員に相談：留学を続けたい！
  - 2017年夏からのセント・アンドルーズでの課程博士開始を目指そうということに
  - 2016年1月出願、3月にオファー。また、同時期にJASSOの学位取得型奨学金に採択
- 2017年夏、東大で既に博士課程にいたことを勘案し、2年次編入というかたちで入学許可
  - PhDプロポーザルの書き方については以下のサイトが非常に参考になった
  - <https://standrewsschoolofhistory.wordpress.com/2015/01/08/writing-a-phd-application/>

## 2-2. 博士論文の 執筆スケジュール

- 2017/8：ちょっと体調不良や住宅事情や人間関係の悩みもあり停滞期
  - とにかく First Year Review (15,000words, 予備論文のようなもの) を仕上げることに尽力
    - 実質的に2016年1月から2018年3月までの成果
    - 序論的な内容（方法論、Literature review等）とケーススタディ
  - このあたりでREArmやBrillの論文と併せて英語で論文を書くことによろやく慣れてくる

## 2-2. 博士論文の 執筆スケジュール

- 2018/9：留学に慣れてきて少しずついろいろな活動ができるようになる
  - IMCでの発表、ウィーンでのワークショップへの参加等々で博論の内容の一部の中間報告
  - いくつかの個別学会発表を経て博論全体の構成が見えてくる

## 2-2. 博士論文の 執筆スケジュール

- 2019/20：春～夏に業績が出て、少しモチベーションが上がる。夏以降集中的に執筆
  - 春先のレビューで12月～翌年1月（=Semester Iの終わり）に提出することを確定
    - ※長期的目標はなるべく変更しないように念を押される
  - 1章書いて指導教員に送る⇒見てもらっている間に別の章を書くというペース（おおむね一月10,000words）
  - 途中、8月に海外学振、10月に岡大への就職が決まる
  - 2019年末に提出の予定だったが、（印刷所や事務が年末年始休業のため）少し伸びて2020年初に提出！



## 2-3. 口頭試問 (VIVA VOCE)

- セント・アンドルーズの場合、提出3ヶ月以内に口頭試問が行われることを義務付け
- イギリスの場合、基本的に外部審査者と内部審査者が審査し、**指導教員は審査に関わらない**
- 提出2ヶ月前頃（だったと思う）から試験官を決めるために動き始める
  - 後期ビザンツ・初期オスマン史の先生（内部）とアルメニア史（外部、仏EPHE）の先生に依頼
  - 提出者と指導教員の合意で決定される（はず）

## 2-3. 口頭試問

- 2021年3月9日に口頭試問
  - 既に日仏ともに新型コロナの不安はあったが、決行することに
    - （イタリアが既にロックダウン、フランスで感染拡大。3月後半に英国でも最初のロックダウン。ギリギリのタイミング）
  - 大学がストライキでロックアウト中だったため、内部審査者の先生のご自宅で行う
  - 1時間程度の諮問を経て、タイポのみ修正で合格
- 試験官による所見は博士論文出版に際して重要になることも（後述）

## 2-4. 博論執筆に際して

- 求められるクオリティ (St Andrewsの場合)
  - ‘A significant and original contribution to knowledge or understanding consistent with what may reasonably be expected of a diligent student after three to four years of full-time study’
  - ‘Submissions should be clearly written, well argued and should indicate a satisfactory knowledge of the field of study’
  - ‘Should contain material **worthy of publication in some form**’
    - 大学のリポジトリに公開
    - 個別論文として切り出す
    - 単著として出版

## 2-4. 博論執筆に際して心がけたこと

- 入学時の指導：「いきなり世界を変えなくても良い。二人の試験官が納得するものを書くべし」
  - 審査する人を「想定読者」として意識するのは重要
- 指導教員との面談のほか、学会発表や中間報告セミナーをペースメーカーとして活用
  - 日本の歴史系学会は完成度を求められる（...気がする）が、国際学会ではアイデアを出してフィードバックを得ることを重視するところも
  - 80,000 wordsという分量は途方もなく見えるが、細分化した上で進捗を可視化してみることに
  - **直近の到達可能な目標**を設定してみることに

## 2-4. 博論執筆に際して心がけたこと

- 心配していた既発表論文との差分（UKの場合）
  - 確かに、既発表論文をまとめあげて博論にするのはNG
  - ただし、一部が既発表論文に基づく程度なら支障はない（‘Absolute rule’ではない）  
※英国内でも機関ごとに差異あり

### 3. 博論の書籍化について（経過報告）

- 博論の書籍化について：英国の場合、基本的に学術出版にプロポーザルを送ることになる
  - 含む内容は出版社・シリーズによって異なる
- 多くの場合は出版社の担当エディターにまずは連絡を取ることになる
  - 分野の担当表を載せている出版社も
  - OUP : <https://global.oup.com/academic/contactus/editorial/?cc=jp&lang=en&>
  - EUP : <https://edinburghuniversitypress.com/publish-with-us/meet-the-editorial-team>
  - Brill : <https://brill.com/page/AcquisitionsEditors/acquisitions-editors>
- 多くの出版社はガイドラインを載せているので、それに従うと良い
  - <https://global.oup.com/academic/authors/proposals/?cc=jp&lang=en&> (OUP)
- ただし、（特にシリーズものの場合）**editorial boardの研究者**とやり取りをすることも！

### 3. 博論の書籍化について（経過報告）

- 博論提出時、出版のためembargoをかける（そうでないとリポジトリで公開される）
- Vivaで書籍としての出版を推奨される
  - OUPのOxford Studies in Byzantiumシリーズをすすめられる
- Chief Editorの（研究者）にプロポーザルを送付
  - 提出したのはプロポーザル、章のサンプル、そして**エグザミネーターの所見**
    - 博論出版の場合、エグザミネーターの所見（とそこでの本としての出版の推薦？）が重要になる場合も！

## 4. 外国語で論文／博士論文を書くために：「英語で」論文を書く

- 留学前に参加した西洋中世学会若手セミナー（2015年10月）：  
<http://www.medievalstudies.jp/general/aboutseminar201510/>
- スタイルに慣れること：cf. Williams, *Style*
  - 論理構成
    - 大きい論点（overarching argument）から入って個別の事例へ
    - 立てた問題に対する答え（statement）⇒それを支持する事例、引用etc.⇒反論の想定...
    - 一番インパクトのある論点を最初に持ってくる、等
- 'What you study' と 'How you study'（特にマイナー分野の研究）
  - Annual reviewを学内の異分野の歴史研究者が担当：想定読者にあわせた書き方の重要性
  - 研究費の申請書などにも生きてくる



## 4. 外国語で論文／博士論文を書くために：「英語で」論文を書く

- 英文の用法のチェック：<https://ludwig.guru/>
- ネイティブチェックや指導のフィードバックを意識して本や論文を読む
  - チェックを受けた際、ミスを機械的に直すだけでなく、自分の「クセ」のようなものを意識する
  - 本や論文を読む際に、（自分がうまく書けていないことに関して）こういうことが言いたいとき、こういう論理展開をしたいとき、**どう書けば良いのかというストックを増やす**
  - チューター経験も役に立ったし、チューターをするのにも役立った
  - 自分の分野の著名雑誌の論文等を参考にするといいかもしれない

## 4. 外国語で論文／博士論文を書くために：（英語で）「論文を」書く

- アイデアを大事にする。小さな思いつきや疑問点でもストックしていく
  - 問題意識に関する疑問点や思いつきの内、十中八九は勉強不足や思い違いかもしれない
  - しかし少数は実際に先行研究が間違っていたり、新規性のあるアイデアかもしれない
  - そうしたものの積み重ねていくと、一つや二つは論文になるような問題設定が見つかるかもしれない
  - 単体では広がらないアイデアが他と結びついて広がることもある

## 4. 外国語で論文／博士論文を書くために：（英語で）「論文を」書く

- 史料や文献に関する個別のノート（だけ）ではなく、自分の思考をトレースできるような記録を残す
  - むしろ問題意識がハッキリしていれば前者を逐一取る必要はない気がする
  - 記録は論文を書く言語と同じ言語で取ると良い気がする
  - そしてそれを整理したものをもとに論文を書いていく
    - （システムティックにやる方法を考えたい...Scrapboxなどの活用？）
- ‘Write as you go’：インプットや構想を練ることに徹しすぎないように注意
  - 非ネイティブが80,000～100,000wordsを3～4年で書くのは決して楽な作業ではない
- とにかくコツコツ
  - 「コアタイム」を設ける（例えば1日1時間半～2時間は博論を「書くこと」に集中する、とか）
    - 留学先には「ブートキャンプ」があった
  - ライティンググループなどで互助的にやるともっといいのかもしれない